

聖ホセマリアの生涯 －4

ホセマリアの初ミサは、聖週間（キリストの死去を記念する週）に当たっており、かつ亡き父のために捧げられものであったため、招待客も少なく、寂しい雰囲気の中で祝われました。

2020/09/20

聖ホセマリアは司祭になる直前に父を亡くしました。すでに苦しい生活を送っていた一家は、さらに貧しく

なったのです。ホセマリアは家族を
経済的に支えることになりました。
そこで、母と姉カルメンと弟サンチ
アゴを自分が住むサラゴサに呼び寄
せました。しかし不思議なことに、
このことが親族を怒らせたのです。
彼らは貧しい親戚を身近にもつこと
を恥じたのです。母方には三人の司
祭を含む少なからぬ親戚がいました
が、その中の最も裕福な人たちはこ
の一家を助けようとはしませんでした。
た。

このような孤独の中でホセマリアは
1925年3月28日に司祭に叙階
されました。普通、新司祭はゆかり
の教会で大勢の親族や友人を招いて
初ミサをたてます。初ミサは喜ばし
い雰囲気の中に祝われるもので
す。しかし、ホセマリアの初ミサ
は、聖週間（キリストの死去を記念
する週）に当たっており、かつ亡き
父のために捧げられものであったた
め、招待客も少なく、寂しい雰囲気

の中で祝われました。ホセマリアが選んだ場所は、神学生時代によく祈りに行ったピラールの聖母像が見守る小聖堂でした。それは大聖堂の中にあり、ミサの間も周囲にはたえず大勢の人が行き来していました。

ドロレス夫人は喪服で参列しました。息子の晴れ姿を見ずに先立った夫と一緒に忍んだ苦労を思いだしてか、「大粒の涙をひっきりなしに流し、時には失神するかに見えた」と参列者の一人は語っています。

新司祭は、ミサの中で自分が聖別した聖体をまず母親に授けることを楽しみにしていました。しかし、聖体拝領が始まろうとしたとき、一人の見知らぬ女性が進み出てドロレス夫人の前に跪いたので、その人に聖体を与えねばなりませんでした。聖ホセマリアは、楽しいお祝いのときはいつも、神様が自分に何か小さな

辛いことを与えられると言っていました、今回もそうだったのです。

その晩、ドローレス夫人はお祝いに来てくれた一人の従兄弟とカルメンの友人を家にさそい、ささやかな料理でもてなしました。新司祭は辞令を受け取りましたが、それはまたしても辛いものでした。

司祭になったその日、聖ホセマリアはサラゴサから25キロほど離れた農村に行くようにとの辞令を受け取りました。その村の主任司祭が病気だったので、代理をするためでした。普通なら新司祭は、年配の司祭が主任を務める教会で、その司祭の指導を受けながら仕事をします。聖ホセマリアにとって、養うべき家族を町に残して行くことは辛いことでした。

3月31日、村に到着。宿泊場所は親切な村人の家。早速教会に行ってみると、作りは立派でしたが、中は

埃にまみれていました。それで翌朝のミサのために教会内部の掃除に取りかかります。長い行事が続く聖週間と復活祭が終わり一息つくと、司牧の計画を立てました。まずは村人を知ること。わずかの間に村にいた200家族を全部訪問しました。そして、寝床の病人を訪れ、告解を聞き、望む人には聖体を持って行く。また、大人も子どもも教義の知識がないのを見て要理教育に励みました。こうして熱心に司牧に励みましたが、その熱心さをからかう村人もいました。

神父の下宿には子どもが一人いました。その子は羊の群れを連れて朝早く家を出て日が暮れるまで家に帰ってきません。神父はかわいそうに思い、夜に教会の教えの手ほどきをすることにしました。少し勉強が進んだ頃、どれくらい分かったのか知ろうとして「もし大金持ちになったら、何がしたい」と尋ねました。す

ると、「金持ちになるって、どういうこと」と聞き返します。そこで「それはたくさんのお金や着物や土地や山羊などを持つことだよ」と言うと、彼は目を輝かせて「それなら、ぶどう酒を入れたスープを何杯も食べたいな」と答えました。それを聞いて神父は考え込みました。「話しているのは神様だ。人間の野心なんて、こんなちっぽけなものであることを教えておられるのだ」と。

村の教会の世話役の息子は、神父のよく仕事を手伝ったりして、仲良くなったようです。聖ホセマリアの死後、その生涯の調査が行われたとき、次のように話したと言います。「この村に来られた神父様たちの中で最も印象に残っているのは、なぜかわかりませんが、エスクリバー神父です。神父様はとても愉快でユーモアにあふれ、上品で裏表なく、優しい人でした。ここにおられたのは

短い間でしたが、私は神父様がとても好きになり、ここを去られたときは本当に寂しく思いました」。神父は5月18日にサラゴサに帰りました。

.....

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <https://dev.opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-4/> (2025/08/08)